

令和元年6月7日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02649

研究課題名(和文) 甲骨文字から楷書に至るまでの漢字の歴史的機能変化

研究課題名(英文) Change of historical function of Chinese character from oracle bones inscription to calligraphy

研究代表者

落合 淳思(OCHIAI, Atsushi)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：20449531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、甲骨文字から楷書まで、三千年以上にわたる漢字の歴史を対象とし、字形の成り立ちや変化を分析した。

一般書として『漢字の字形』(中央公論新社、2019年)、専門書として『漢字字形史小字典』(東方書店、2019年、印刷中)を発表しており、漢字の字形がどのように作られたのか、またどのように変化して現在の楷書になったのかを解説している。論文として、「漢字の時代的変遷とその数値化」(『中国古代史論叢』十集、2019年、印刷中)を作成した。これは、従来の個別の字形史研究ではなく、統計値として漢字資料全体の時代的傾向を把握するための方法を提示したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の研究とは異なり、漢字の歴史を視覚化あるいは数値化したことが特徴である。視覚化については、二次元的な字形表を用いており、縦軸を時代とし、横軸に異体字を並べた。この方法により、漢字の字形の起源や、字形の変化を容易に把握できるようになった。また、数値化については、各時代の漢字資料に基づき、発音の表示要素や字形構造の変化など、漢字の諸要素を数値化し、統計することで、各時代の漢字全体の特徴を把握することができる。

また、漢字の字形の歴史や文字としての漢字の特徴を明らかにすることは、中国史学・中国文学などのほか、教育学や書道学にも役立つ。

研究成果の概要(英文)：In this study, we analyzed the formation and change of the character shape, covering the history of Chinese character over 3000 years from the oracle bones inscriptions to the calligraphy.

As a general book, "漢字の字形(The shape of Chinese character)" (Chu-ou ko-ron shin-sha, 2019) and as a specialized book, "漢字字形史小字典(Small script dictionary of chinese character's shape)" (To-ho sho-ten, scheduled for 2019) are presented. It explains how it was formed and how it was changed to become the present calligraphy.

As a thesis, we made the "漢字の時代的変遷とその数値化(Epochal Transition of Chinese Characters and Its Quantification)" ("中国古代史論叢十集(Chinese Ancient History Series 10th Collection)", scheduled for 2019). This is not a traditional research of individual letters history, but a method for grasping the historical tendency of the whole Chinese Characters data as a statistical value.

研究分野：中国古代史・漢字学

キーワード：漢字の字形史 漢字の字源 甲骨文字 金文 篆書 漢字の成り立ち 数値化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

漢字は、最古の資料である甲骨文字から、三千年以上にわたって現在まで受け継がれた文字体系である。従来の研究では、漢字の字形を歴史的に分析する場合に、少数の事例のみを対象にしていた。また、字形の成り立ち(字源)の分析についても、最古の漢字資料である甲骨文字ではなく、比較的新しい資料である金文や小篆(篆書)から分析する研究が多かった。こうした方法では正確な結果を期待することは難しい。

2. 研究の目的

本研究では、より多くの、そしてより長い時代の漢字資料(特に字形)を収集し、字源や字形の変化について、正確な分析をおこなう。また、各時代の漢字資料を要素ごとに統計し、文字資料としての漢字の性質を明らかにする。

3. 研究の方法

各時代の漢字字形の収集については、近年に有用な資料集が多く出版されており、『甲金篆隸大字典』(四川辞書出版社、2010年新版)、『戦国文字編』(福建人民出版社、2015年修訂本)、『秦文字編』(中華書局、2015年)などを活用した。また、代表者(落合淳思)のこれまでの研究成果から、『甲骨文字辞典』(朋友書店、2018年第2版)や甲骨文字全文検索データベース(<http://www.koukotsu.sakura.ne.jp/top.html>)なども用いた。

そして、字源や字形変化の分析方法として、収集した各文字の字形について一覧表を作成したことが特徴である。図1にその例として、「令」とそれから派生した「命」の字形表を挙げたが、縦軸に時代をと(上が古い)、横軸に同時代の異体字を並べ、二次元的に表示している。この方法により、その文字がどのように成り立ったのか、また現在の楷書までどのように変化してきたのかを明瞭に示すことができる。

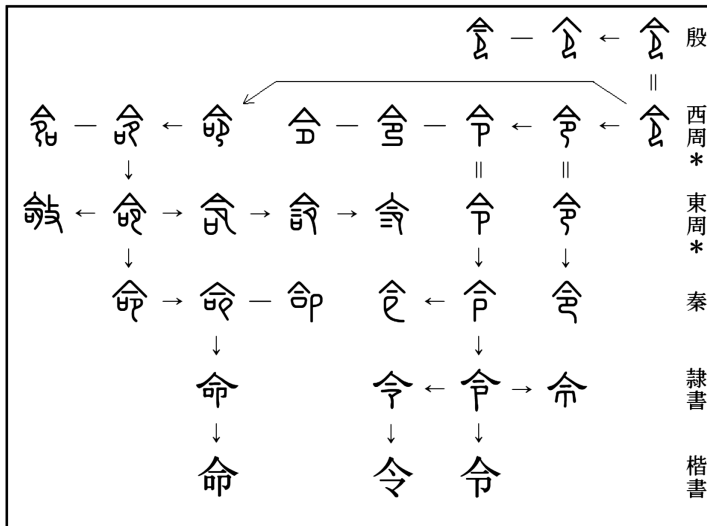


図1 (『漢字字形史小字典』49頁)

また、各時代の漢字資料について、要素ごとに数値化し、時代的变化を明らかにするという分析方法も提示した。図2にその例を挙げたが、これは漢字の字形のうちに発音が表示されているものの比率である。時代が降ると発音の表示が増加する傾向が明らかである。

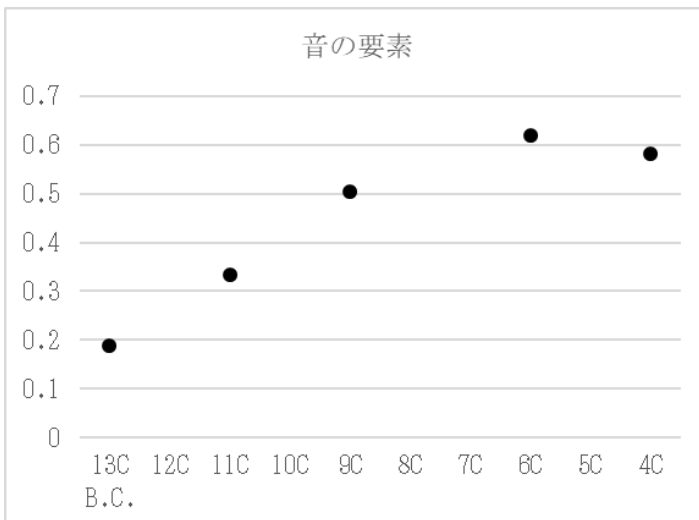


図2 (「漢字の時代的変遷とその数値化」図7)

4. 研究成果

字源研究と字形史の分析については、一般向けの著書として『漢字の字形』、専門書として『漢字字形史小字典』を製作した。いずれも前掲図1のような字形表を用いて、字源や字形変化を解説している。前者は100あまり、後者は400あまりの字形表を掲載した。

個別文字に関する成果としては、例えば「丁」の成り立ちについて、従来言われていた「釘の象形」は後代の解釈であり、起源ではないことを示した（実際の成り立ちは都市の城壁など四角形の構造物）。また、「黒」についても、従来の学説では主流であった「火に関係する」という解釈が、実際には後代の解釈によって改編された字形であり、起源としては動物の皮革の象形であることが推定できた。そのほか、「主」「曲」「易」などについて、従来の研究が情報不足による誤解や曲解であったことを明らかにした。

こうした個別文字の研究成果は、中国史学や中国文学などのほか、教育学や書道研究においても役立つことが期待できる。

また、漢字の諸要素の数値化については、論文として「漢字の時代的変遷とその数値化」を発表しており、方法論を提示した。具体的には、前掲図2の音の要素のほか、字形構造の変化についても統計しており、やはり時代が降ると構造の変化が蓄積することを明らかにできた。

この方法は、漢字のほかの要素についても応用できるものであり、今後、字形や発音に関する諸要素について分析を進める予定である。

なお、数値化について、当初は漢字の抽象表現と具象表現を主題とする予定であったが、研究の手続き上の問題により、後回しになった。ただし、すでに前掲『漢字字形史小字典』を元に試算をしており、図3のように、具象表現（視覚+）が当初は大部分を占めていたが、後に抽象表現（視覚-）が増加したことが判明している。

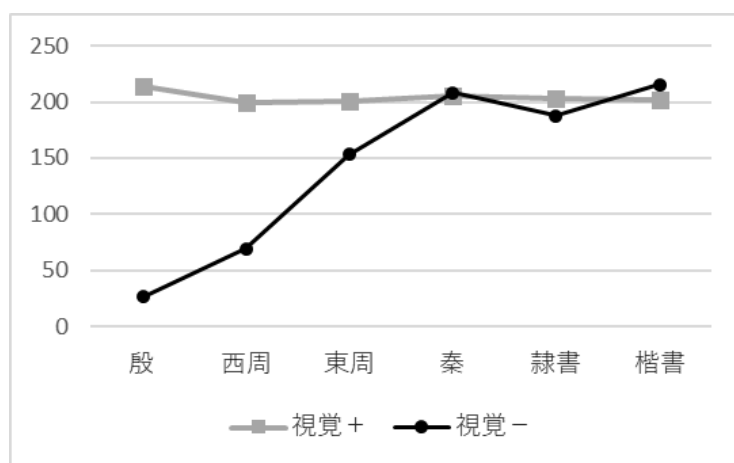


図3（未発表）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

落合淳思「漢字の時代的変遷とその数値化」、『中国古代史論叢』十集、2019年、印刷中、査読有

〔学会発表〕(計 2件)

落合淳思「甲骨文字の特殊性」(アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」、2018年)

落合淳思「漢字の字形変化と抽象性」(アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」、2017年)

〔図書〕(計 3件)

落合淳思『漢字字形史小字典』、東方書店、2019年予定、印刷中

落合淳思『漢字の字形』、中央公論新社、2019年、224

落合淳思『十五種甲骨集同片綴合表』、朋友書店、2018年、260

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐藤 信弥

ローマ字氏名：SATO, Shinya

所属研究機関名：大阪府立大学

部局名：人間社会システム科学研究科

職名：客員研究員

研究者番号(8桁): 10768162

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。